

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年5月20日(木)

### 《キリストの内にとどまる - キリストの目、耳、感覚で - 》

今日読まれた福音(ヨハネ 17・20 26)は、共同体の黙想などの際に、よく引用される箇所です。そして個人的にも結構好きなイエス様のみ心がよく表れている箇所です。

結婚生活40年以上になる方はいますか。その方々は、ご自分の結婚相手について何パーセントくらい把握していますか。奥さんのこと、ご主人のことを何パーセントくらい分かっていると言えますか。「完全に分かる」と言えたら、それはおかしいですよ。そのように、私たちが『一つになる』ということは本当に難しいことです。

信仰的に未熟な考え方では、「同じ考え、同じ好み、同じ条件に置かれる」ことを「一つになる」と考えます。しかし、成熟な信者である皆様は少し違う観点から見なければなりません。今日の福音でイエス様は「すべての人を一つにしてください。」と御父に願いましたね。「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。」という言葉で『一つになる』祈りをなされたのです。

さあ、この太田教会のことをよく考えてみてください。昨日の話の続きになるのですが、私より気が早い人がいますね。逆に気持ちの変化が遅くて、すでに私があきらめた人もいます。“一年後には悟るだろう”という気持ちになる人もいます。そして何でも赦してくれそうな人もいますが、少しだけ腹を立てそうな人もいます。みんな違うけれど、みんなキリスト信者です。私たちの家族です。これはどういうことでしょうか。

私たちが忘れてはいけないことがあります。私たちは死ぬときまで、自分の妻、自分の夫さえ、100パーセント理解することは無理でしょう。ですから、そういう意味では『一つになる』こともできないと思います。しかし成熟した観点で見れば、私たちが一つになれる方法が一つだけあります。それは今日の福音でイエス様がおっしゃった『キリストの内にとどまる』という方法です。では、『キリストの内にとどまる』とはどういうことでしょうか。カトリック信者になることでしょうか。洗礼を受けること、堅信を受けることでしょうか。それとも週日のミサに与ることでしょうか。『キリストの内にとどまる』とは、どういう意味なのでしょう。

「キリストのうちにとどまっているかどうか」は、「信者であるかないか」より、「本当に神様を愛しているかどうか」です。そのために、「私は、できる限りキリストの目、キリストの耳、キリストの感覚で、全てのことを見よう、聞こう、感じようとしているか」考えてみれば、自分がどのくらいキリストの内にとどまっているかが、すぐに分かります。片方の足は世の中に置いて、もう片方の足は仕方なくイエス様の内に置くのでは、信仰とは言えません。とにかく、言葉通り本当に『キリストの内にとどまる』ことができれば、いろいろな違いはあっても、それぞれの人がみんな自分の家族、自

分の兄弟に感じられると思います。

これが『キリストの内に留まる』ということです。それは国籍の問題ではないのです。キリストの内にとどまり、キリストの感覚でこの世を見よう、知ろうとすれば、つらいこともあるでしょうが、何が正しいかはすぐに分かります。

今日の福音で私たちは、「一つにならなければならない」と言われています。それは、昨日も申し上げましたが、型にはまったように、全て同じ形を作ることはありません。それぞれの異なる人柄を尊重し、認めながら、キリストが歩んできた道、教えてくださった道を歩もうとすることです。そうすれば、私たちは一つになれる。もうすでにできているのかもしれませんが。

いろいろな違いがあってもキリストの内にとどまれば、簡単に譲れます。簡単に責めることをやめられます。簡単に相手を支えられます。もし「譲れない」「赦せない」「和解できない」「相手を支えられない」とすれば、その人は絶対にキリストの内にとどまっているとは言えないのです。

ありがとうございました。